

【報告2】

英国のロイヤル・パビリオンにおける保存・修復・
復元をテーマとしたイベント

An Introduction of 'BEHIND THE SCENES'
of The Royal Pavilion in England

水谷 健介*
Kensuke MIZUTANI

〈Abstract〉

The Royal Pavilion is said to be the most extraordinary palace in Europe, mainly because of its Indian exterior (fig.2) and its Chinese taste interior (fig.3). It was built in Brighton between the late 18th and the early 19th century, for the Prince of Wales, who became King George IV later.

Since 1993, the Pavilion has held a valuable event named 'BEHIND THE SCENES' for a week every November (fig.1), to develop audiences, heightening understanding of its conservation and restoration. That is because until recent years the Pavilion had experienced a drop in visits from local residents and the public had had little appreciation of its value, which has been kept by its conservators.

To appeal to a wide range of age and interest groups, this event consists of some forms of museum communication: walkabout tours and lectures (fig.4), demonstrations and explanations (fig.5~9), and a video programme.

These activities brought some remarkable results to the Pavilion. For example, admissions rose by 77% in a normally quiet winter period and the number of local resident visitors increased by 215% over a previous year with no similar events. This is because of a key policy of this event, accessibility, especially for local residents.

As to my comment through this event, this case seems a good example to think how any local museum should be managed for better future of the residents and community. And although conservators' work like this case is rarely seen by the public, I consider that we should not forget that how exactly we can understand our own history depends on their quiet work.

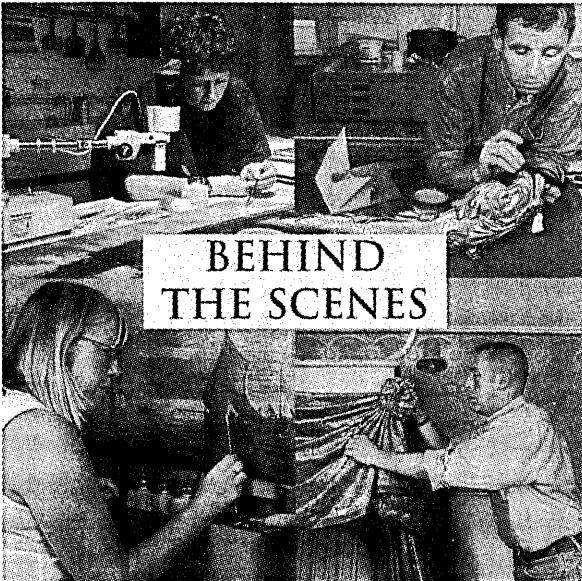
1. はじめに

私は、現在留学中の学校への入学準備のため英語研修を行なうべく、1995年の10月から翌年の年明けにかけて英国南部のブライトン (Brighton) の近郊に滞在しました。その折、私が博物館学に興味を持っていることを知っていた英語学校の先生より渡

された一枚の地元の新聞記事を通じて、ブライトンのロイヤル・パビリオン (The Royal Pavilion) において「ビハインド・ザ・シーンズ」と銘打たれた、これまで一般の人々の間で認識の薄かった同館の建物、内装、及び収蔵品の保存・修復・復元活動を知らしめるためのイベントが開かれることを知り

* みづたに けんすけ

オランダ・アムステルダム芸術大学大学院修士課程博物館学科 (Reinwardt Academie)



BEHIND THE SCENES

**THE AWARD-WINNING "BEHIND THE SCENES" WEEK...
AT BRIGHTON'S ROYAL PAVILION 13-19 NOVEMBER 1995.**

A fascinating insight into the skills and techniques which have gone into restoring one of the most extraordinary royal palaces in Europe.

Your chance to find out more about: gilding, woodturning, graining, decorative finishes, painting on glass, historical soft furnishings, care of prints and drawings, and conservation of objects.

A week packed with special lectures, displays, tours and demonstrations of work in progress organized by the Pavilion's Conservation Team.

All this is FREE with the normal Pavilion admission ticket.

For further details and a timetable of events please telephone the Public Services Section on 01273 603005. The Royal Pavilion is open daily from 10am to 5pm.

BRIGHTON
ANTIQUE & LEISURE SERVICES

fig.1 「ビハインド・ザ・シーンズ」案内用チラシ

ました〈fig.1〉。正直言って、この分野についてはあまり興味のなかった私でしたが、博物館学を専攻する以上は見ておくべきだと思い、結果として期間中に3度も足を運ぶこととなり、更にこれが契機となって同館の庭園の復元・維持のためのボランティア活動にも参加することにもなりました。

また、私の狭い知見の限りでは、「ビハインド・ザ・シーンズ」のような類のイベントは少なくとも日本においては見聞の例がありません(もしあれば、失礼多謝、ぜひご一報下さい)。そういう意味で、紹介という形であれば、私のような若輩者でも筆を執らせて頂く価値はあるのではないかと思います、今回投稿させて頂いた次第です。

2. 活動の背景

ロイヤル・パビリオンは、18世紀末から19世紀初めにかけて、後の英国王ジョージ4世 (George IV) となる、時の皇太子の命により建てられた宮殿で、

19世紀半ばにビクトリア女王によりブライトン市に売却されてからは同市が管理しています。

しかしこの売却以前に、同女王により大部分の貴重な内装及び家具類が撤去されてしまいました。その後それらは王室より、永久貸与という形の物も含めて戻って来ましたが、このような訳で現在に至るまでの約150年間、その復元作業が延々と続けられてきたのです。

さて、ヨーロッパにありながら、インド風の外観〈fig.2〉と中国風の豪華絢爛な内装〈fig.3〉を特徴とするこの風変わりな歴史的建造物は、「ヨーロッパで最も並外れた宮殿」という触れ込みで、1995年には40万人もの人々を引込みました¹⁾。しかし、つい最近までは地元からの来館者数が減る傾向にありました。また、比較的有名な観光アトラクションとは言え、その価値についての一般の認識は薄かったそうです。更に、多くの人々の間では、最近行われたある大がかりな復元作業の終了によって、もはやコンサベーションの必要性はない、とさえみなされたのです。

このような状況に対しパビリオン側は、この特異な建物、内装、及び収蔵品を保存・修復・復元することの重要性とその役割に対してもっと来館者に理解してもらい、更には新しい、幅広い来館者層を開拓しようとの狙いから、「ビハインド・



fig.2 ロイヤル・パビリオンの外観
(同館リーフレットより)

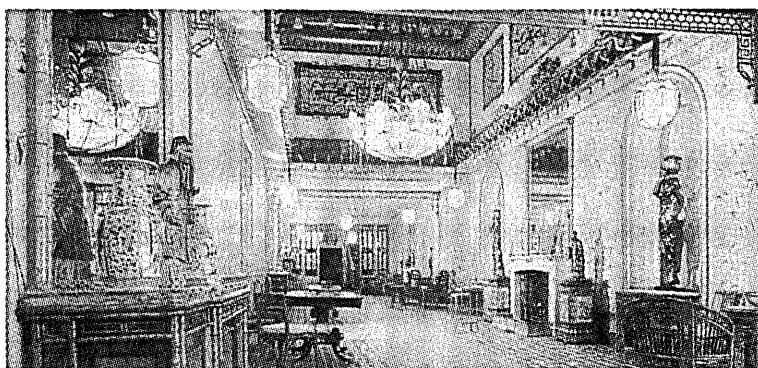


fig.3 ロイヤル・パビリオンの館内（同館リーフレットより）

ザ・シーンズ」を企画するに至ったわけです。こうして1993年11月を初回として、以後毎年11月半ばに1週間の期間で開催されています。開催にあたり、なぜこの時期が選ばれたかについては、後述します。

3. 活動組織

ロイヤル・パビリオンの保存・修復・復元活動は、19世紀半ば以来行われてきました。現在11人のコンサベーターがここで働いていますが、彼らはまたこの地域にある他の3つの博物館²⁾での職務も兼務しています。しかし「ビハインド・ザ・シーンズ」の開催時には、11人全てのコンサベーターだけでなくロイヤル・パビリオン公共サービス部（Public Services Section）及びロイヤル・パビリオン・ガーデン友の会（Friends of the Royal Pavilion Gardens）も一緒になってこのイベントをもちたてます。

4. コミュニケーションの方法

幅広い来館者層を取り込むために、「ビハインド・ザ・シーンズ」は複数の方法で多角的なコミュニケーションを実践しています。本章では、私が実際に訪れた、1995年11月に催された時の内容を紹介します。

4-1. 館内ツアー（walkabout tour）及び講義

館内ツアー及び講義は、期間中毎日2回（週末は3回）催されました。全部で7種類のテーマが用意され、それぞれ2ないし3回実施されました（fig.4）。これらのうち私が参加したのは、15日午

後2時からの‘Painting for Effect’と、19日午後3時からの‘The Poyal Pavilion : 150 years of restoration’の2つです。

前者は館内ツアーの例で、館内の壁、天井、柱に描かれた幾つかの奇妙なペインティング（例えば、木の柱に描かれた龍の絵）と、それが醸し出すある種の効果（例えば、その龍の絵と木目との一体感）について、講師が実物の存在する場所に案内して解説を加えるというものでした。

また後者は講義の例で、過去において建物の外観及び内装のどの部分がどのようなダメージを受けてきたのか、またそれに対してコンサベーターたちがどのような処置を施してきたのかについて、スライドをまじえながら解説されました。

ともに約1時間程度の内容でしたが、特に前者は平日にもかかわらずなかなかの盛況ぶりでした。なおこれらのツアーないし講義に参加するためには、開始前にあらかじめ入口で参加の旨を告げて申込みを証明するカードを貰い、開始時にそれを受付のスタッフに見せるという手続きをとります。これらのツアー及び講義を通じて、来館者はコンサベーターによる保存・修復・復元の対象となった数々の例を見ることができるわけです。

4-2. 実演及び解説

実演及び解説は、館内に設置されたブースにおいて行われました。実演、解説いずれの形をとるかは、各ブースによって異なっていました（fig. 5～8）。本来館内は撮影禁止ですが、スタッフの特別の許可を得て撮影することができました。これらの他にも、

BEHIND THE SCENES AT THE ROYAL PAVILION 13- 19 NOVEMBER 1995

11 am	2pm	3pm
Monday 13 November		
<i>The Royal Pavilion: 150 years of restoration Birthe Christensen (Lecture)</i>	<i>Regency Fabrics and Furnishings Mike Jones (Lecture)</i>	
Tuesday 14 November		
<i>John Nash and the Royal Pavilion Grenville Birch (Lecture)</i>	<i>Painting for Effect Jon Latham (Walkabout Tour)</i>	
Wednesday 15 November		
<i>Music Room Murals- History & Conservation Janet Brough (Lecture/Tour)</i>	<i>Painting for Effect Jon Latham (Walkabout Tour)</i>	
Thursday 16 November		
<i>Recreating Regency Furniture Robin Page (Walkabout Tour)</i>	<i>Regency Fabrics and Furnishings Mike Jones (Lecture)</i>	
Friday 17 November		
<i>Restoration of the Royal Pavilion Gardens Virginia Hinze (Lecture)</i>	<i>Recreating Regency Furniture Robin Page (Walkabout Tour)</i>	
Saturday 18 November		
<i>Music Room Murals - History & Conservation Janet Brough (Lecture/Tour)</i>	<i>Recreating Regency Furniture Robin Page (Walkabout Tour)</i>	<i>John Nash and the Royal Pavilion Grenville Birch (Lecture)</i>
Sunday 19 November		
<i>Painting for Effect Jon Latham (Walkabout Tour)</i>	<i>Regency Fabrics and Furnishings Mike Jones (Lecture)</i>	<i>The Royal Pavilion: 150 years of restoration Birthe Christensen (Lecture)</i>

All conservation week lectures and walkabout tours are free of charge to all those with a valid admission ticket. Tours will be limited to 20. Lectures and tours will take approximately 45mins- 1hr.

fig.4 fig.1の裏側に示された館内ツアー及び講義のスケジュール表



fig.4-2 解説の例：
「ギルディング（箔置き）・テクニク」

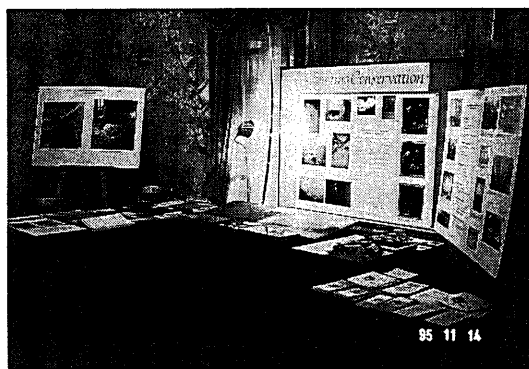


fig.7 解説の例②：
「ペインティング・コンサベーション」

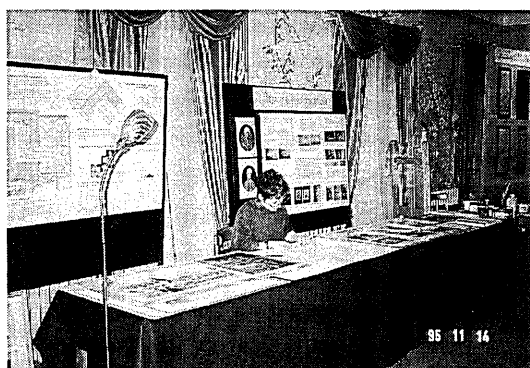


fig.5 実演の例：
「ペーパー・コンサベーション」

「ウッドカービング（木彫り）」「グレイニング（木目出し）&マーブリング（大理石模様出し）」など、実にさまざまなテーマが展開されていました。

余談ですが、ロイヤル・パビリオンはその建物正面に19世紀のスタイルで復元・維持されている庭園を擁しています。この作業は担当のコンサベーターの指示のもとで地元のボランティアの人々により行われており、この活動を案内するコーナーもまた館内に設けられていました<fig.9>。ここに立ち寄ったのが契機となり、私もこの活動に何回か参加することとなりました。

4-3. ビデオ・プログラム

ある一室を会場として、約20分の番組で、ジョージ4世の兄弟たちのための寝室がどのようなプロセスで修復・復元されたか、という内容を見せていま

した。なおこの部屋は1994年から一般公開されています。

5. 活動の結果

さて、以上のような活動を通じて、「ビハインド・ザ・シーンズ」は幾つかの注目すべき結果をもたらしました。その1つが、入館者数の大幅な増加です。このイベントが開かれた冬期のオフシーズンにおいて77%、特に地元からの来館者数は類似イベントの開かれなかった前年と比較して215%も増加しました。

これらの数字は、このイベントのキーポリシーとされた「アクセシビリティ（accessibility）」、つまりロイヤル・パビリオンをいかにして人々にとってとつきやすいものにするか、という考え方に基づいた結果です。パビリオン側は、観光客でごったがえす夏期ではなくあえて閑散期である冬期に開催することで、観光客よりもむしろ地元から新しいそして幅広い客層を取り込み、比較的静かなかつリラックスした状態で見学してもらおう、と目論んだのです。

またこのポリシーは、通常の入館料を払うだけで誰でも参加できること、更にマーケティングの一環として、地方及び中央の様々なマスコミを抱き込んだことにも反映されています。

6. おわりに

以上が、3度の訪問時とその後に得た情報に基づいた限りでの、「ビハインド・ザ・シーンズ」の概



fig.8 解説の例③：ブライトン博物館の展示物の修復についてのブース

要です。ここで、簡単ながら私の所見を述べておきます。

まず、ここで実践されている地元重視の態度は、特に地域の市民・社会のより良き未来のために第一に貢献すべき地域博物館の運営のあり方にとって、少なからず参考になるのではないのでしょうか。なぜなら地域の文化遺産はその未来を考える上での素材であり、地元の人々こそそれを第一に理解すべきであり、それを推進することこそが地域博物館の役割でしょうから。

また、ここで主にとりあげたコンサーベーターたちの作業は、普段一般の人々の目に触れることはないでしょう。しかしこうした機会を通じて、少なくとも私は、彼らの地道な仕事ぶりなくして我々の正しい歴史認識はあり得ない、ということを改めて思い知らされました。何事も、裏方がしっかりしてこそ、咲くべきものも咲くのではないのでしょうか。

それにしても、例えば数館を兼務しているとは言え、たった1つの地域にさえ11人もの保存・修復・復元のプロフェッショナルを擁しているこの国は、なんと文化に理解のある国なのでしょう。

なお本稿は、現在在学中の学校の授業の一環として、1996年2月に行われた「博物館におけるコミュニケーションの形態」をテーマとした学生プレゼンテーションにおいて発表された内容を、投稿用に手

直したものです。この貴重なイベントを私に初めて知らせて下さった英語学校LRGD Study CentreのLyndsay Godbere-Dooley先生、及び多くの貴重な情報をご提供下さり、かつ本誌への投稿をもご承諾下さったロイヤル・パビリオン公共サービス部のAnne Burrill部長（本稿は、主として同部長によるレポート³⁾及び私の問合せに対する回答に基づいています）には、この場を借りて特に厚く御礼申し上げます。

最後に、このイベントは1996年11月11～17日に再び開

催される予定とのこと。ご興味をお持ちの方のために、問合せ先を付しておきます。

Public Services Section,
The Royal Pavilion,
Brighton, East Sussex BN11EE,
ENGLAND
Tel: +44-1273-713249 (直通)
Fax: +44-1273-779108 (館代表)

註

- 1) *Royal Pavilion News* (Royal Pavilion, Brighton Borough Council, 1996)
- 2) ブライトン博物館 (Brighton Museum and Art Gallery)、ブース博物館 (Booth Museum of Natural History)、及びプレストン・マナー (Preston Manor) の3館。各館の詳細については、上記ロイヤル・パビリオンの連絡先にお問合せ下さい。
- 3) Anne Burrill, *Behind the Scenes at the Royal Pavilion, Brighton* (Conservation Week 7th-13th November 1994)

参考文献

- ・'Behind the Scenes' at Brighton Pavilion (Museum & Galleries Commission Newslet-

~~~~~ Become a Royal Gardener ~~~~~



Join the Friends of the Pavilion Gardens and contribute to the ongoing history and success of these flourishing gardens. Since their restoration the Regency gardens have become very much a beauty and attraction in their own right ... the perfect setting to the spectacular seaside palace of George IV.

All you need to become a part of this valuable team is to enjoy gardening and meeting people.

You do not need specialized skills or experience - we'll teach you that.

So if you're aged between 18-80 years old, in good health and have a few hours to spare on Friday mornings, why not join us in caring for the Pavilion's plants.

**Drop into the gardens on a Friday morning or telephone
Birthe Christensen on 01273-713242
to find out more**

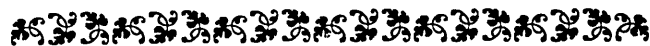


fig.9 ボランティアへの案内チラシ

ter, 1995)

• J.M.F. Rutherford, *The Royal Pavilion* (Royal Pavilion, Art Gallery and Museums, Brighton

Borough Council, 1995)

(1996年3月30日受理)